



こーひーぶれいく

日本の気候と着衣：あるいはわたしがアロハを着る理由

青山 道夫

Aoyama Michio

現在福島でマンションを借りて住んでいるが、夏場に研究所へ出勤する時のエレベーターで「その服で（研究所に）行かれるのですか？」との少し驚きの意味合いを込めた声をかけられたことがある。アロハシャツを着てバスと電車で出勤する途上の出来事であった。3年前まで住んでいたつくばのマンションでも、とある大新聞にアロハ姿のインタビュー写真が掲載されweb上ではカラーで掲載されたため印象が強くなり、認識が極めて容易となったようで、そのアロハシャツを着て出勤する途上のマンションのエレベーター内では100%何者であるかを認識されていたようだ。偶然であるが同じアロハシャツ姿の筆者の写真が、2013年に開催されたIAEA（国際原子力機関）のScienceForumのリーフレット（http://www-pub.iaea.org/MTCD/Meetings/PDFplus/2013/cn207/cn207_Brochure.pdf）に講演者の1人として掲載されている。数時間以内に鮮明な写真をIAEAに送るよにとの依頼が、日本時間の夕刻にメールで来たので、実験室内ドラフトを背景にそのとき着ていたアロハシャツ姿で写真を撮ってもらい、少し加工して送ったことを思い出した。

作務衣やアロハシャツを着て夏を少しでも涼しく過ごす生活は、夏にネクタイをしたり上着を着ることはないだろうという当たり前の判断で始めていた。これは環境省が2005年にクールビズとしてかりゆしウェアを、その後アロハシャツ（2012年からスーパークールビズとして公認）をお役所で公認する以前からである。

では何故筆者が夏は作務衣やアロハシャツを着て

暮らしているのか？答えは「日本の気候に合致していて合理的」である。アロハシャツの起源は日本からハワイに行った移民の着物であるとの説が主流である。その熱帯に属するハワイホノルルでの月平均最高気温と非熱帯日本国内で現在筆者が住んでいる福島市を含めて那覇市、長崎市、東京大手町気象庁の月平均最高気温の最近2年間の夏場（7月あるいは8月、2015年と2016年）を比べてみた。結果は、ホノルルで32.2度と30.6度であったのに対し、福島市では31.4度と31.6度、那覇市31.6度と32.6度、長崎市30.4度と33.7度、東京大手町30.5度と31.6度であった。日中の最高気温の観点では、日本の北部を除く広い範囲とホノルルでは同じような気温であり、いずれも30度を超えている。また室内での状況を考えると、省エネの観点から夏季の冷房の室温の目安は摂氏28度とされているが、湿度を考慮しない28度は明らかに非科学的である。日本の北海道、本州、九州、四国では、夏場の湿度は70-80%に達する。空調を入れると室内では湿度が下がるとはいえ、とても快適に仕事ができる状況ではない。既に国際的には作業者の暑熱環境を評価する場合には、気温に加え、湿度、風速、輻射（放射）熱を考慮して総合的に評価する必要があるとして、ISO7243:1989（Hot environments -- Estimation of the heat stress on working man, based on the WBGT-index）が制定されている。国内ではその翻訳版のJIS Z 8504「WBGT（湿球黒球温度）指数に基づく作業者の熱ストレスの評価－暑熱環境」が制定されている。このJISの詳細はここでは省略するが、経験的な指数とはいえ、この暑さ指数（WBGT-indexの通称）は熱中症の予防や良い環境で仕事をするにもっと使われるべきであろう。

既に、アロハ、かりゆし、作務衣を含めると20枚くらい夏用の服を持っている。今年の夏も日替わりで着て一夏できるだけ快適に過ごし、良い仕事もしようと思う。

（福島大学環境放射能研究所）